

鎖骨

寺田寅彦

青空文庫

子供が階段から落ちてけがをした。右の眉骨びこつを打ったと見えて
眼瞼がんけんがまんじゅうのようにふくれ上がった。それだけかと思っ
ていたが吐きけのあるのが気になった。医者が来て見ると、どう
も右肩の鎖骨が折れているらしいというので驚いて整形外科のT
博士に診みてもらうとやはり鎖骨がみごとに折れている。しかしそ
のほうはたいした事ではない。それよりも右耳の後上部の頭蓋ずがいこ
骨つをひどく打ったらしい形跡があつて、そのほうがはなはだ大
事だというので、はじめはたいした事でもないと思つた事がら
だんだんに重大になって来た。T氏の話によると、頭を打つてか
ら数時間の間当人はいっこう平気で、いつものように仕事をして

いて、そうして突然意識を失って倒れることがよくあるそうである。

それは脳に徐々の出血があつて、それがだんだんに蓄積して内圧を増す、それにつれて脈搏みやくはくがはじめはだんだん昂進こうしんして百二十ほどに上がるが、それでも当人には自覚症状はない。それから脈搏がだんだん減少して行き、それが六十ぐらいに達したころに急に卒倒して人事不省に陥るそうである。それだから、頭を打つたと思つたらたとえ気分に変わりがないと思つても、絶対安静にして、そうして脈搏を数えなければならぬそうである。そうして危険になつたら脊柱せきちゅうに針を刺して水を取ったりいろいろのことをしなければならぬそうである。

自分も小学生時代に学校の玄関のたたきの上で相撲をとって床の上に仰向けに倒され、後頭部をひどく打ったことがある。それから急いで池の岸へ駆けて行って、頭へじやぶじやぶ水をかけたまでは覚えていたが、それからあとしばらくの間の記憶が全然空白になってしまった。そうして、今度再び自覚を回復したときは、学校の授業を受けおおせて、いつものように書物のふろしき包みと弁当をちゃんとさげて、通りなれた川ばた道を半ばぐらいまで歩いて来たときであつた。そうして、いつものとおり、近所の友だちと話をしながら帰って来ていたのであつたらしい。それにかかわらずその間数十分、あるいは一二時間の間の記憶が実にきれいに消えてしまっていたのである。それから宅へ帰^{うち}つても、しか

られるのがこわいから、この事は両親にもだれにも話さないでいた。考えてみると実に危険なことであつた。

こういう場合に対する上記のT博士のいったような注意は、万人が万人日常よくよく心得ていなければならぬはずであるのに、今度という今度までついぞ一度も聞いた記憶も読んだ覚えもない。学校でも教わつたかもしれないが、教わらなかつたような気がするし、また新聞雑誌などではとかく役にも立たない事や悪い事ばかり教わつても、この大切な事だけはどうも教わらなかつたような気がする。教育が悪かつたのか、自分の心がけが悪かつたのか、両方が悪かつたかである。こんなだいなことは学校でも新聞でも三日に一ぺんずつ繰り返して教えていいかと思う。

てんゆう
天佑

と名医の技術によつて幸いに子供は無事に回復した。骨の折れたのも完全に元のとおりになるのだそうである。

鎖骨というものはこういう場合に折れるためにできているのだそうである。これが、いわば安全弁のような役目をして気持ちよく折れてくれるので、その身代わりのおかげで肋骨ろつこつその他のもつとだいたいなものが救われるという話である。

地震の時にこわれないためにいわゆる耐震家屋というものが学者の研究の結果として設計されている。筋かいほうづえ方杖等いろいろの施工によつて家を堅固な上にも堅固にする。こうして家が丈夫になると大地震でこわれる代わりに家全体が土台の上で横すべりをする。それをさせないとやはり柱が折れたりする恐れがあるら

しい。それで自分の素人^{しろうと}考えでは、いつその事、どこか「家屋の鎖骨」を設計施工しておいて、大地震がくれば必ずそこが折れるようにしておく。しかしそのかわり他のだいじな致命的な部分はそのおかげで助かるというようにすることはできないものかと思う。こういう考えは以前からもっていた。時々その道の学者たちに話してみたこともあるが、だれもいつこう相手になつてくれない。

しかし今度自分の子供の災難が動機になつてもう一ぺんこういう考えを練り直してみたくなった。どうも人間のこしらえたものはとかく欠点だらけであるが、天然のものは何を見ても実に巧妙にできている。人間の五体でもけがをするとそこが痛む。動く

ひどく痛むからしかたなくじっとしている。じっとしていれば直るものはひとりで直るようになってきているものらしい。もし、これがちつとも痛くなかったら平気で動き回る。動き回れば傷も骨折もなかなか直るときはないであろう。

腸胃が悪いと腹が痛かったり胸が悪かったりするから食物を食う気になれない。もしもなんの苦痛もなかったら平気でなんでも食う。食えばいよいよ病気が重くなつて行くに相違ない。風邪^{かぜ}をひいて熱が高くなると苦しくて仕事ができなくなる。寝たくなる。寝れば直るが無理すると肺炎になる。

これらの平凡すぎるほど平凡な事実の中に、実に驚嘆すべき造化の妙機のあることに今まで少しも心づかないでいたのが、今度

の子供の災難に会って始めて少しばかりわかりかけて来たような気がする。

犬や猫はこれをちゃんと心得ているようである。そうしてたいていのけがや病は自然の力で直してしまふ。人間はわずかの知恵に思い上がって天然をばかにして時々無理なことをする。そうして失わなくても済むのに二つとない生命を失う場合が多いように思われる。

医術というものは結局こういう造化の天然の医術のほうじよしや幫助者の役目を勤めるものであるらしい。名医はすなわちもつとも優秀な造化の助手であるかと思われる。

肉体における医者に相当して、精神の医者もあるはずである。

そういう医者に名医ははなはだまれなように見受けられる。精神の胃が悪くて盛んに吐きけのある患者に無理に豚カツを食わせてみたり、精神の骨がくだけて痛がっているのに無体に体操をさせてみたり、そうかと思うとどこも悪くない人間にギプス包帯をして無理に病院のベッドの上に寝かせるようなことをする場合もありはしないかという心配がある。

それはとにかくわれわれ弱い人間が精神的にひどい打撃を受けたときに、頭がぼんやりしたり、一部の神経が麻痺^{まひ}して腰が立たなくなったり、何病とも知れない病人同様の状態になって蒲団^{ふとん}を頭からかぶって寝込んでしまったりする。あれもやはり造化の妙機であつて、ちょうど「鎖骨挫折^{ざせつ}」のような役目をするためにど

こかがどうかなるのかもしれない。

悲しいとき涙腺るいせんから液体を放出する。おかしいとき横隔膜が

週期的痙攣けいれんをはじめめる。これも何か、もつとずっと悪い影響を

救うための安全弁の作用をしているに相違ない。それで医術がもつともつと進歩すると、精神のけがでもこれら天然の妙機を人工的に幫助ほうじょすることによつて楽に治療できるようになるかもしれない。

自分が今ここでこんな空想を起こしているのも、事によると子供のけがでびっくりして少し頭が変になったせいかもしれないし、それならばまた、こんな事をおくめんもなく書く気になるのは、その天然自然の治療法を無意識に実行しているのかもしれないの

である。

（昭和八年二月、工業大学蔵前新聞）

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦隨筆集 第四卷」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店

1948（昭和23）年5月15日第1刷発行

1963（昭和38）年5月16日第20刷改版発行

1997（平成9）年6月13日第65刷発行

入力：（株）モモ

校正：かとうかおり

2003年7月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鎖骨

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>